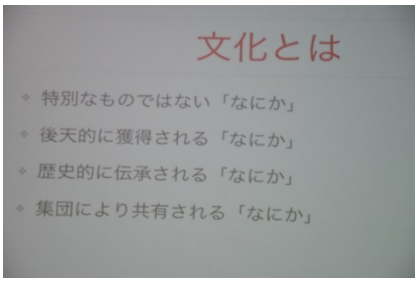
平成 27 年度第７回文系チャレンジ講座を実施しました

平成 27 年度第７回文系チャレンジ講座が，平成 28 年１月 13 日、「文化の働きを確かめてみよう」をテーマに、本学経済学部の久保田　亮先生によって行われました。

遠隔配信された大分雄城台・大分鶴崎・大分商業・日田・安心院・高田・国東・別府青山 翔青・大分西・三重総合・臼杵の 11 校の各高校から 124 名の高校生が受講しました。

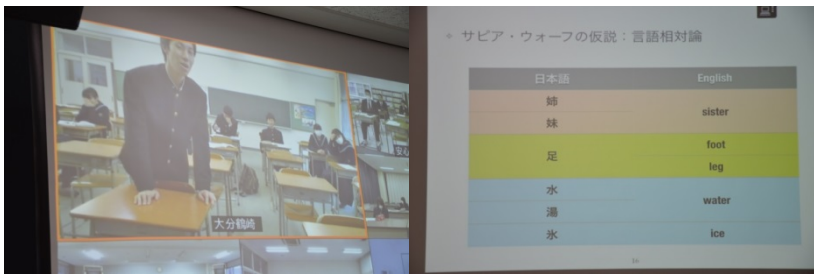
はじめに久保田先生は「この授業では，文化が人間の振る舞いやモノの見方にどのように作用するかについて，区切る，名付ける，意味付ける，結びつける，という四つのキーワードに注目しながら学習していきます。自身の文化を意識し，よく知ることは社会に生きる多様な人々と交流したり，協働したりする際に必要不可欠なことです。多種多様な人々と将来的に関わっていくことを見据えて，まずは自身の文化を意識し，文化と人間の日常との分かち難い関係に目を向けてみることから始めてみましょう。」と、受講生に語りかけました。



文化人類学が専門で、特にアラスカ南西部の“ユピック”という民族の研究をしている久保田先生は、「文化ってなんだろう」というテーマで、参加した高校生と問答を繰り返しながら講座を進めていきました。

まずは、「文化とは？」という問いに対し、「伝統文化」「習慣」「暮らしの中で使っていること」という答えが受講生から出され、それらを踏まえ、「特別なものではない」「後天的に獲得される」「歴史的に伝承される」「集団により共有される」ものが文化であると定義づけました。その中で「言語」を取り上げ、「言語における『音』と『意味』との関係は社会的な取り決めなしには成立しない恣意的なものである」という抽象的な命題について、犬の写真や犬を表す言語を例に挙げて説明しました。

さらに、①世界に存在するモノ・コトが、どんな音で表されているのかは、言語ごとに異なる、②世界に存在するモノ・コトに与えられた意味は、時代や地域により異なり恣意的である、③世界の切り取り方（＝区別、結合）は、言語により異なる、という原則について、具体例を示し、受講生に翻訳させたりしながら説明しました。話題は「音素 [1]」にまで及び、日本語が英語より 20 も少ない 24 の音素で成り立っていることが分かったときは、生徒からも驚きの声が出ました。



最後に「日常生活と文化は密接に関わっている。にもかかわらず、文化の働きは日常的に意識されない。」大学では、このような普段意識しないことを深く真剣に研究していきます。受講生のみなさんと一緒に研究していきましょうと、メッセージを送り講座は終わりました。講座後のアンケートには、「総合的に判断して良かった」(99%「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ)、「教員は真剣に取り組んでいた」(98%)、「授業量は適切であった」(94%)、「わかりやすかった」(92%)、「受講生は授業に意欲的に取り組んだ」(95%)、という評価がでました。遠隔配信については、「音声は良く聞こえた」(92%)、「映像はよく見えた」(93%)という結果がでました。受講生の具体的な声として「サピア＝ウォーフの仮説 [2]は、興味深かった」、「生徒と先生の間で質問のやり取りが出来た」などが寄せられ、大学で学ぶ内容の深さと興味を実感できた講座になりました。

1　語の意味を区別できる音声の最小単位。https://kotobank.jp(2016.3.8)

2　ある言語を母語とする人の認識・思考はその言語によって影響されるという説。https://kotobank.jp(2016.3.8)